中島重と「学生キリスト教運動（ＳＣＭ）」（１）

倉橋克人

目次

はじめに
一　学生運動の高揚と同志社
二　全国基督教学生討論会の開催
三　エルサレム宣教会議とイエス伝研究運動
四　学生キリスト教運動の高まり
五　中島の神学的主張をめぐって
六　運動の先鋭化と瓦解
むすびにかえて

（以上本号、以下は次号予定）

はじめに

我等同信相謀りて茲に雑誌『社会的基督教』を発刊する。誠に微弱言ふに足らざるものなれども、是我等衷心よりの叫びであり、赤心よりの聲である。我等の企図する所は純然たる宗教運動であり、宗教思想運動である。或は斯の如きは、切迫せる時代にとりては不急の閑問題であり、又経済問題を中心として転回せる現代の舞台に於ては、登場すべからざるものの戸迷であるかの如くに感ぜられるであろう。然れども吾人の観る所は聊か異なる、破壊は唯物論でも出来るが、建設は宗教主義に依らねば出来難い、闘争は憎悪ででも出来るであろうが結合と連帯の培養に至りては遂に、宗教的人類愛のみが、之を可能くする所である。宗教無くしては、人生は力と光明とを失ひ、社会は潤無く愛無く索漠沙漠の如きものとならん（傍点引用者）[1]。

この文章は、一九三二年五月に創刊された『社会的基督教』の「発刊の辞」の一節である。起草したのは中島重（しげる）、彼は当時、関西学院で政治学、憲法の教鞭をとっていたキリスト者であった。中島は、この機関誌の主筆として、次第にファシズムの時代思潮が日本社会を席捲してゆく中にあって、日本のキリスト者が、こうした時代にどのように向き合ってゆけばよいのか、そして、いかなる思想的な足場に立脚して社会的な実践活動を行なってゆけばよいのかを考え、提言していった。

その際に中島は、自分たちが企図している運動が「純然たる宗教運動」であって、「宗教思想運動」であることを強調している。「破壊」は唯物論的な世界観ででもできるが、「建設」は「宗教主義」によらなければ果たせない。「闘争」は「憎悪」ででもできるであろうが、それは決して、社会の「結合」と「連帯」の培養には至らない。そして、その「結合」

と「連帯」を具現するものは「宗教的人類愛」であると主張する。彼は続けて、「制度は如何に立派に完備しやうとも、人の間に愛無くば、遂にその制度は運転することを得ないものである。来らんとする国際主義の社会といひ社会主義の社会といひ、キリストの十字架愛の活ける働きなくしては、遂に立つ能はず、運転すべからざるものである」と述べる。しかしながら、「新社会の建設にとりて宗教の使命は決して軽少ではない」にもかかわらず、「たゞ此大任に堪ふる宗教を求むるとき、遂に吾人は既成教団の何処にも見出すことを得ず、転た人類社会の前途にとりて寒心に堪へない」と嘆いている。それゆえに、「是我等自らの微力浅才を顧みる遑無くして立つに至つた」というのである。そして、次のような悲愴な決意も披瀝する。曰く、「今は実にファッシズム的国家主義乱舞の時であり、金融資本重圧の時代である。我等は、此等の向ふに神の力に依る『神の国』の実現を確信しつゝ敢へて地味で不急で不用の如く思はるゝ宗教運動を行為さんとするものである。此れ無くしては、如何なる社会運動も遂に、最後の魂そのものを缺ぐことを思ふが故である」[2]と。

中島が、それまで在職していた同志社を去って関西学院に移ったのは、一九三〇年四月のことであった[3]。彼を関西学院に紹介したのは、賀川豊彦、河上丈太郎、杉山元次郎たちであったという[4]。その前年の二九年一月に中島は、同志たちとともに、同志社労働者ミッションを再編して日本労働者ミッションを結成していたが、関西学院に移ってからも、彼のキリスト者としての社会的な実践意欲は衰えることはなく、なお一層の新しい運動に対する思想的な模索を続けていった。その彼が、改めて意を決して同志たちとともに立ち上げたのが、この『社会的基督教』を媒体とした言論活動であった。

では、どうして彼は、このようなキリスト教ジャーナリズムを始動させる必要を覚えたのであろうか。その理由として考えられることは、一つに、自分の同志たちとの精神的な靱帯を一層、強化することであり、今一つは、自らが

標榜する「社会的キリスト教（Social Christian Movement）」に対するさまざまな批判と期待に応えて、自分の神学的な主張を理論的に弁証してゆくことであった。それでは、そうした彼の行動を促がしたものは、何であったのであろうか。筆者は、それは彼が「学生キリスト教運動（Student Christian Movement）」に関与したことによるのではないかと考えている。この研究は、中島が『社会的基督教』を発刊するに至った契機の一つとして、この「学生キリスト者運動」を位置づけることによって、彼の運動との関わりを実証的にたどるとともに、この運動の、日本キリスト教史における歴史的意義について考察しようとするものである。なお、「学生キリスト教運動」についての歴史的な評価としては、チャールズ・H・ジャーマニー氏による「一九二〇年後期から三〇年にかけての、日本におけるキリスト教学生運動（SCM）こそ、実は社会的キリスト教が日本社会の諸問題と取り組む劇的な姿を、最も如実に示す格好の場であった」[5]といった見解がある。この小論において、その「劇的な姿」の一端を描くことができればとも考えている[6]。

一　学生運動の高揚と同志社

戦前日本の学生キリスト者たちによる運動とは、どのようなものであったのであろうか。それを知るにはさしあたり、全国各地に存在しているキリスト教学校史をひもといてみなければならないであろう。しかしながら、それらの学校史を開いてみても、学生たちの自生的な運動について叙述しているものは乏しく[7]、最近になって出版された『キリスト教学校教育同盟百年史』（同編纂委員会編、教文館、二〇一二年）を通覧しても、学生たちは教育の受給的な存在であって、彼らの主体的な運動の足跡については記述されていない。その意味で、『同志社学生キリスト教運動史』

（同編集委員会編、二〇一〇年）は貴重な仕事である。

日本における学生運動の始まりは、[8] 既に「明治期」から旧制高等学校などで、たとえば校長排斥運動や同盟休校のような形で起こっていたが、本格的な学生運動の展開は、一九一〇年代の後半になってから始まったとされている。自主的な活動団体としては、やはり第一次世界大戦直後の一九一八年九月に京都帝国大学で結成された京都労学会が最初のものであり、次いで同年一二月には、東京帝国大学の法学部の有志の学生たちを中心にして、「世界の文化的大勢たる人類解放に新気運に協調し之が促進に努む」、「現代日本の合理的改造に従ふ」を綱領にした新人会が結成されている。さらに翌一九年二月には、私立大学としては最初の学生団体である民人同盟会が早稲田大学で設立された（後に建設者同盟に改称）。

よく知られているように、新人会は、東大教授の吉野作造の門下生の学生たちが発足した団体であったが、参加していた学生たちの中には、たとえば赤松克麿のように共産党に入党する者もいたし、早稲田大学の建設者同盟にも、佐野学の影響を受けて共産党に入党する学生もいた。[9] それらの学生団体は、「大正デモクラシー」の思潮的な影響を受けて普選運動にも参加していったが、一九二〇年五月一〇日に第一四回衆議院議員選挙の実施と、折からの第一次世界大戦の戦後不況によって、運動は衰退を余儀なくされた。

しかし、一九二〇年代に入ると日本の学生運動も俄かに活気づいてゆき、全国の大学や旧制高校、高等専門学校では社会思想の研究団体が次々と誕生して、一九二二年一一月七日には、それらの学生団体の連合機関である学生連合会が結成された。その日が、ロシア革命五周年の記念日に当たっていたことにも示されるように、それまでは、相互の親睦と交流や、普選運動を主たる活動にしていたそれぞれの学生団体は、従前の人道主義的な活動の性格から、次第にマルクス主義に傾倒するようになってゆき、[10] 翌二三年二月には、過激社会運動取締法案と労働組合法、小作争議

調停法の制定反対運動を全国的に展開し、それにともなって、それぞれの団体の名称も、たとえば、早稲田大学社会科学研究会、三田社会科学研究会、法政大学社会問題研究会、青山学院社会思想研究会などに改められるものが増えていった。そして、二四年九月に東京帝国大学で開催された学生連合会の全国代表者会議では、学生連合会は高等学校連盟と合流して、学生社会科学連合会と改称された。この時点で同連合会の加盟団体の数は四九校にも及んで、会員数も約一、五〇〇名と膨れ上がっている。

学生社会科学連合会の加盟団体は、その後も増え続けて、それらの地方ブロックとして、関西では京都帝国大学、同志社大学、大阪外語などを中心に関西連合会が生まれ、関東や東北地方では、関東連合会と東北連合会が組織されていった。そして、翌二五年七月に京都帝国大学で開催された第二回全国大会において、学生社会科学連合会は日本学生科学連合会に改称され、この時、「学生運動の重要なる任務」として「学生運動は無産階級運動の一翼にして、之と同様の目標、戦略を有するものなるを以て、其の教育も亦労働教育と同じく資本主義教育の一否定要素として、当然マルクス主義、レーニン主義を其の指導原理と為すばからず、故に吾々学生は其の精神に従ひ、終始内外に対する批判協力を怠らず、殊に理論の観念化と闘争精神の衰退を警戒し、闘争と不可分に結合せられたる理論の把握につとめ」とする教育テーゼが採択された。

このテーゼによって、日本の学生運動における「マルクス主義的一元教育の必要」が高唱されたのであったが、加えてこのテーゼには、今後の運動方針をめぐって、「明確なる指導原理の徹底的習得（マルクス主義とレーニン主義の歴史的関係―其の弁証法的統一）」についてのオルグ活動に努めるとともに、「全国的教程を作成し、各研究会に対し巡回宣伝部を派遣して其の速成的教育を図り、尚関東関西東北連合会の教育部員の定期交替を行ひ、更に労働組合、労働学校、農民組合、農民学校、政治研究会、無産青年同盟等との連絡を保つ」ことの必要性が強調されている。[二]こ

うした急激な学生運動の高揚の背景には、この年の五月に上海で起こった「五・三〇事件」に関連して、中国の学生運動から受けた思想的な影響も少なくなかったが、国内的には、各校のキャンパス内における軍事教練の強化に対する学生側の反発があり、さらに、一九二〇年から始まった深刻な経済不況によって、労働者、農民の生活が逼迫していったばかりでなく、就職をひかえた学生層の将来に対する不安や逼塞感が働いていたものと思われる。そうした中で、一九二六年一二月に、第一次共産党事件（一九二三年六月）によって解党を余儀なくされていた日本共産党が再建されたことも、学生たちの運動の左傾化に拍車をかけることになっていった。

以降、学生たちは、労働運動や農民運動などの学外における社会運動との連携を求めてゆくとともに、マルクス主義や社会主義への思想的な傾倒を強めて、全国の大学、高等専門学校、旧制高校で、相次いで社会科学研究会（社研）が組織されていった。そして、学生社会科学連合会（学連）は、現役将校の学校配属制度と軍事教練に対する反対運動、自治擁護運動などに積極的に取り組んでいった。

学連の軍事教練反対運動について言えば、一九二三年七月五日に軍事研究団事件が起こり、翌二四年一一月一二日に、こうした弾圧に対して全国学生軍事教育反対同盟が結成されている。また、同年一一月から翌二五年一月にかけて社研の解散命令が下されて、その年の一月一〇日には軍事教育案が可決されて、同年一〇月に小樽高商の軍事教練事件が起こると、学連は各地で反対運動を展開していった。しかし、この事件を機に政府当局は学生運動の弾圧に乗り出し、同月には三高進化会が解散させられ、一二月一日には、かの京都学連事件が起こった。

また、自治擁護運動については次のようであった。一九二六年五月二九日に文部大臣によって内訓五ヶ条が告示されたが、これに対して六月二八日には、全日本学生自由擁護同盟が結成されている。しかし、九月七日に緊急勅令第四〇三号「治安維持ノ為ニスル罰則ニ関スル件」が発布され、次いで一一月一〇日に訓示された「国民精神作興ニ関

スル詔書」の中では、関東大震災後の国家社会の治安の悪化を防止すべく、「輓近学術益々人智日ニ進ム（。）然レトモ浮華放縦ノ習漸ク萌シ軽佻脆激ノ風モ亦生ス（。）今ニ及ヒテ時弊ヲ革メスムハ或ハ前緒ヲ失墜セムコトヲ恐ル」[12]と「思想国難」が強調されて、この詔書に沿った形で、翌二四年一月一五日に教化団体連合会（会長は、一木喜徳郎）が結成されると、中央報徳会をはじめとする三〇団体がこれに参加して、全国的な規模の国民教化運動が推進されてゆくと、同盟もこの動きに次第に組み込まれてゆくことになった。そして、この翌二五年三月に治安維持法が制定されたのであったが、この治安維持法が、最初に国内で適用されたのが、先の京都学連事件であった。

京都学連事件は、一九二五年一一月一五日に同志社大学の構内で軍事教練に反対するビラが発見されたことが発端になって起こったものであったが、翌一二月一日に特高課は、京大社研と同志社大社研を家宅捜査し、三七名を行政執行法によって検束した。しかし、そこではさいたる成果もなく、学生たちは全員釈放されることになったが、一二月二〇日に京都地裁検事局は、出版法違反容疑で社研メンバーを検挙する方針を打ち出し、同月三〇日に三六名を検事局に送致するとともに、彼らを治安維持法違反容疑とする報告書を提出したのであった。[13]

この事件に対して中島が、どのような対応を示していたのかについては、詳しいことは分からない。しかし、この事件が及ぼした衝撃は、彼にとっても大きなものであったに違いない。この頃に同志社のキャンパスで活動していた学生グループには、学友会をはじめ、弁論部の学生らによって結成された「啓潮会」や、法学部の学生キリスト者たちが中心になって活動していた「襄会（ヨゼフ）」[14]、進歩的な学生たちが集まった「新生会」などがあったが、中島は、「新生会」と「啓潮会」の顧問をしていたからである。

同志社大学当局は、京都学連事件に当たっては、未決の獄中にある四名の学生たちに対して自主退学を勧告するなどして、守勢的に対応した。総長の海老名弾正は「大学及び高商一部学生の左翼思想は警察官の戒心を促し、世間を

騒がし、引続き本科第一課程三名と高商三年生一名とが検事局に召喚され、今日に至るも尚釈放されざるは実に寒心の至りである」と述べて、「大学教授会に於ては、此の事変に鑑みる所あり、社会思想研究会員をして、校外研究会との連絡を絶たしめた」と報告している。[15] その結果、この事件で検挙された学生たちのほとんどは学園に戻ることはなく、そして、社会科学研究会も、公然とした活動を存続させることができなくなって、ほどなく消滅してしまい、以後は、非合法的な活動として潜行してゆかなければならなくなった。

こうした事態に直面して中島ら法学部の教員たちは、大学の自治に対する危機感を覚える一方で、右派・中間派の無産運動との結びつきを強めて、マルクス主義とは一線を画した独自の社会運動の可能性を模索しようとしていたのではないかと思われる。[16] そうした中で、京都学連事件が起こった一一月に同志社における賀川豊彦の特別伝道集会がもたれ、それをきっかけにして「マルキシズムの正しい批判と基督教の再認識」を目的にして、中島を中心にした有志の教職員と学生たちによって「雲の柱会」が結成され、[17] それが、同志社労働ミッションの設立、そして日本労働者ミッションの結成へと発展していったのである。[18] しかしそれは、単なる反共的な護教運動ではなく、マルクス主義からの問いかけを正面から受けとめつつも、新たなキリスト教の思想的、実践的な展開を求める変革運動であった。

二　全国基督教学生討論会の開催

さて、この時期の日本の青年、及び学生キリスト者による運動体といえば、やはり、日本基督教青年会同盟（ＹＭＣＡ、以下、時に「同盟」と略す）の存在を抜きにしては語ることができない。爾来、同盟は、主に学生層を対象にした伝道と、相互の親睦と交流や修養を目的にした活動を推進していたが、それとともに、日本のキリスト教

界が直面したさまざまな問題に対しても、積極的な対応を行なっている。

先述したように、日本における自主的な学生団体として一九一八年に東京帝国大学に新人会が結成されたが、この時、彼らの師であった吉野作造は、学生たちの社会運動への参与については、必ずしも積極的に支持してはいなかった。彼は、学生たちの対外的な活動は時期尚早であるとして、「もう少し勉強しろ勉強しろ」と絶えずブレーキをかけていたという。[19] 吉野が学生たちに期待していたのは社会運動ではなく、その基礎づけとなる学術的な理論研究であり、弁論活動であった。そうして彼は、普通選挙制度の総合的な研究を目的とした研究会を立ち上げたのであったが、学生たちの中には、それに飽き足りずに街頭にくり出す者も出てきて、その後、この研究会に参加していた学生たちの一部に新人会に「転進」する者も出てくるようになると、そうした学生たちと吉野との乖離は次第に大きくなっていった。そしてそれは、新人会による吉野批判という形で決定的なものになったのである。

確かに吉野は、学生たちの学外における社会運動への参加については、あまり肯定的には評価していなかったが、他方では、学生たちの社会奉仕活動については、むしろ積極的に支援していた。たとえば彼は、一九一七年三月に、かねてより理事であった東大ＹＭＣＡの理事長に就任したが、彼が理事長に就いてから、学生や卒業生たちによって、それぞれの専門分野を生かした社会事業が次々に生まれていったのは、その表われであった。同年一〇月には無料診察所の大学生青年会医院が開設されて、翌一八年三月には、「貧民窟」の生活困窮者に対する医療活動を目的にした賛育会病院が設立され、その後、妊婦相談所、乳児幼児相談所、産院、保育所も開設されてゆき、賛育会は母子保護事業としても出発している。

また、一九一八年一二月には、シベリアで消費組合の実際を視察してきた藤田逸男（東大ＹＭＣＡ常務理事）が家庭購買組合を発足したが、これに東大ＹＭＣＡと日本女子大櫻楓会が提携して、吉野も同組合の理事長に就任した。[20]

さらに同年九月には、郷里の和歌山県田辺で弁護士をしていた片山哲の発意によって簡易法律相談所が開設の運びになった（一九二〇年一月に中央法律事務所として独立）、吉野は、その理事長にもなって彼に協力した。こうして、当初の頃は、学生たちの社会運動への関与については消極的であった吉野も、学生たちとの関係を次第に深めてゆくのであった。

一九二三年九月一日に起こった関東大震災では、神田青年会館が倒壊したにもかかわらず、事態に対処するために同盟は、同月五日には東京基督教青年会に救済本部が設置され、罹災者の救護に当たったが、この時、これを全面的に支援したのが賀川豊彦であったことは、広く知られている。[21] この年の一〇月一九日に彼によって設立された本所基督教産業青年会は、東京基督教青年会の救援事業が委嘱される形で生まれたものであり、[22] 吉野は賀川の働きを支援し、本所基督教青年会の理事を引き受けたばかりではなく、各方面を奔走して集めた義捐金を青年会に寄付し、この寄付金を基金として、中産階級以下の人たちに対する低利の事業資金貸付を行なう神視社が設立されている。

しかし、この時期になって急激に高揚していた学生運動の動向に対して、学生キリスト者たちの中にも思想的な感化を受ける者が出てくることは避けられなくなっていた。そして、日本基督教青年会同盟の内部においても、一九二〇年代の後半に入ると、急速に社会問題に関する関心が強まり、キリスト者の時局に対する対応についての問題意識も、俄かに高まっていった。

たとえば、中島重が教鞭をとっていた同志社大学においても、一九二五年一二月起こった京都学連事件は、キリスト者の学生たちにとっても看過できないものであったろうし、翌二六年には軍事教育のためのチャペル使用に反対する運動が学内で起こっている。さらに、一九二八年の一月二三日の新島襄昇天記念日に予定されていた「全同志社閲覧式」に対して、学内の予科、高商、同志社クリスチャン連盟などの学生たちと中島ら教職員たちが反対声明を出し

て、これを無期延期に変更させる運動が起こった。しかし、同年一一月二三日に発生した有終館の火災の不祥事の責任をとって総長の海老名が辞任して、その後、翌二九年四月に理事会が九州帝国大学総長の大原銀太郎を迎える決定を下したことに抗議して、中島ら法学部の若手教員や教職員、学生たちが、総長の留任と理事会の決定に対する反対の姿勢を打ち出して、学生たちによる二週間のストライキが断行される事態に発展した。それに加えて岩倉の土地問題も絡んで、学内の対立は一層、激化していったが、結局、学生たちの声は大学当局に届くことはなく、中島は辞職に追いやられて、関西学院大学に身を転じることになってしまうことになった[23]。

けれども、このような大学の自治と時局に対する危機意識は、同志社に限られるものではなかった。しかしその一方で、天皇制国家権力による思想統制や社会運動に対する取り締まりは、次第に厳しいものとなっていた。一九二八年三月には、日本共産党、労働農民党、日本労働組合評議会などの関係者一六〇〇名が、全国一斉に大量検挙される「三・一五事件」が起こり、それとあわせて文部省は、大学の「左傾」教授の処分を決定して、該当者として京都帝国大学の河上肇、九州帝国大学の向坂逸郎、東京帝国大学の大森義太郎などが挙げられ、田中義一内閣は、四月一〇日以降、東京大学新人会をはじめ、各大学の社会科学研究会の解散を命じて、六月二九日には緊急勅令によって治安維持法の改悪を断行した。さらに翌七月三日には、全警察に特別高等課（「特高」）を設置して、社会運動全体に対する締め付けと弾圧を強化していったのである。

こうした事態の推移を受けて、各大学のキリスト教青年会の中にも、次第に全国の学生運動の動きに触発されて、それまでの活動のあり方を変革してゆこうとする動きが生まれるようになった。そして、そうした動きの転機となったのが、二八年一一月一日から四日にかけて静岡県御殿場の東山荘で、東京帝国大学基督教青年会が創立四〇周年を記念して開催した全国基督教学生討議会であった。そのことは、専務理事の藤田逸男の「開会の辞」にも示されてい

る。彼は、それまでの「最近約十年間の基督教学生運動は、学生そのもの、運動といふよりも、或る一二の先輩の運動であつたといふ方が適切であつた。羊の群の如く、先の羊の尻を後の羊が続くといつた様に、全体としての運動が何方に向つてゐるかは、後の羊は知らない憾がないでもなかつた。それが、今日の学生基督教運動に行詰りが感ぜしめた所以であろう。然るに、此度の学生討議会は、一から十まで、悉く学生の手に於て運ばれ学生自らが考へ、学生自らが為した討議会であつたといふ点は、我が基督教学生運動に新たなる転向を与へないでは措くまいと思ふ（傍点引用者）[24]と、参加した学生たちを鼓舞したのであった。

なお、この討論会の開催の趣旨は次の通りである。

微力をも省みず敢て私共が単独に本討議会を発起するに到りました所以は恰も本年が当青年会創立満四十週年に相当しますので神に対しては申すまでもない事四十年といふ長い年月の間内外多数の方々の多大なる御援助に対して之を機として何等かの方法に於て感謝の意を表明せんとする微衷より出でたるものであります。之が為に我共は切に祈りました結果与へられた課題として先づ第一に解決せねばならぬ最大問題信仰思想上の問題実際上の社会問題に就いて充分討議を徹底させて後我等の採る可き道を示し与へられ度といふ願であります（傍点引用者）[25]。

ここに謳われているように、この時期の各キリスト教学校青年会の学生たちにとっては、「信仰思想上の問題」と「実際上の社会問題」が焦眉の関心事となっており、その二つの課題が、どのように思想的、実践的に切り結ばれるのかといったことが議論の焦点になっていたことが窺われる。討議される統一テーマは「基督教と現代社会思想」とされて、左記の六項目の議題が掲げられた。

一、基督教ハ現代社会ヲ指導シツヽアルヤ（現代社会ニ於ケル基督教の地位）
二、基督者ハ癌代社会ヲ如何ニ考フルヤ
三、基督者ハ階級闘争ヲ如何ニ考フルヤ
四、基督者ハ社会運動ニ参加スベキヤ
五、教会トシテ社会運動ニ如何ナル態度ヲ採ル可キカ
六、我等基督教学生ノ使命ト責任
（イ）学校ニ対シ　（ロ）教会に対シ　（ハ）社会ニ対シ　（ニ）国家ニ対シ[26]

この討議会には、全国から合計五六校一一四名（うち、女子は二一名）の学生たちが参加したが[27]、彼らの指導に当たったのは、今中次麿[28]、斉藤惣一、河井道子、久布白落実、そして中島重の五名であった。彼らは、学生たちの質問に対して、それぞれに答弁したが、今中は、キリスト教とマルクス主義の関係を問う質問に対しては、「イエスの宗教は全ての科学を抱擁して今尚社会を指導し得る宗教である」として、「マルクシズムは科学によつたもので、目的判断、選択的な価値判断に立つたものではない」のであって、キリスト教とはまったく立脚点を異にしており、「吾々クリスチヤンの立場から批判すべき問題ではない」と答えている[29]。

中島は、日程三日目の一一月三日の早天祈祷会で「基督教と現代社会思想」と題して奨励を行なった。彼はその冒頭で、「今までのクリスト教で第二義的なものとされてゐたものが吾々には第一義的なものになつて来た。即ち今後のクリスト教は社会本位であらねばならない」と述べた上で、「従来のクリスト教（プロテスタンテイズム）では、

神と人との関係をのみ重視して来たが、今後のクリスト教は社会をも重視せねばならない。すなわち神、社会個人の関係をもとり扱ふものである」と主張している。そのためには、「今後の神学は社会学と形而上学とに立脚したものであるべきである」として、「クリスト教の本質もそれで、だん〳〵明らかになつてゆくだらう」との展望も披瀝している。

中島によれば、カトリック教会においては「教会即神の国」と考えられていたが、それは一つの社会本位のキリスト教の形態ではあるが、自分たちプロテスタントに属する者はこれには賛成できない、その理由の一つは、「法王が神の権威を代表している」点であるとカトリック教会の教皇制度を否定して、ヘーゲルの「国家を捉へて、神の権威のあらはれとすることにクリスチャンは revolute した」との言葉を引き合いにして、これがプロテスティズムの基本姿勢であると述べている。けれども、中島から見れば、このプロテスティズムは社会本位になりきっていない。そこで、「国家」というものの本質的な理解と社会との関係が改めて問われなければならないとして、次のように訴えている。

国家と社会とを混同してはいけない。国家は一の Functional Association である。国家は全体社会ではない。国家より以上のものがある。それは Gemeinshaft（Community）である。国家はこの Gemeinshaft の手段即ち第二義的の社会である。Gemeinshaft は「組織体」ではない。これは「人間の結合」である。この「結合」の基礎が「宇宙的生命」であると考へる。即ち社会は宇宙的生命たる神に根ざしてゐるのである。而して我々は又各々人格をもつてこの社会に根ざしてゐるのである。この関係を説明するのが神学であり、同時に新しい神観が必要となるのである。(30)

加えて中島は、キリスト教の問題は、畢竟、「十字架の問題」であるとして、これまで考えられてきた「贖罪愛」の意味の「コペルニクス的転向」が起こらなければ、行き詰まった現代世界を救済し得ないと力説して、個人の霊の「悔い改め」といった社会から乖離した抽象的な「自我の考え方を克服すべきである」と主張している。彼によれば、真の意味の「悔い改め」や「救い」とは、「己れの Anti-Social 性」を認めて「イエスの実血」によって、自分自身が「Social される」ことであって、「キリスト者の使命は、Community を神にまで突き進めること」だというのである。[31]

こうした中島たちの問題提起が、どの程度まで参加した学生たちに理解されたかは定かではないが、彼らは、討議会の中で、キリスト教の存在理由とその使命について相互に意見の交換をした。『討議会記録』には、次のような彼らの発言が収録されている。そのいくつかを断片的に引用しよう。

・ 基督教は現代社会を指導してゐない。現代は最も社会的な時代であるに不拘、プロテスタンテイズムは非社会的な宗教である。

・ 基督教は自然宗教より進化して現在のプロテスタンテイズムに到つたのであるが、今や自己内省的なプロテスタンテイズムの役目は終つた。吾々はこの個人主義的なプロテスタンテイズムより、脱出して新しい社会的基督教を獲得せねばならぬ。（中略）資本主義はイエスの最も否定するところである。

・ 私達はクリスト教の精神に全然反する戦争をあくまでも拒否せねばならないと思ふ。これだけの人々が集つてゐて日本を動かすことが出来ぬであらうか！私はこの会が空論で終らないことを希望する。

・ 現代は、資本主義社会であり、商品生産の社会である。現代に於いてはすべてのものが商品化せられてゐる人間が市場を支配するのではなくて、市場が人間を支配してゐるのである。かゝる社会は決してクリスト教と合ふもの

ではない。（中略）現在教会に於いてなされてゐる説教の中には、アカデミツクなものが多い。吾々は吾々の生活をはなれた所に何物もないと云ふ事を主張する。（中略）現在、教会に於て社会運動を批難する傾向があるが、単なる反感から、批難蔑視するのは不当である。

・私の最も主張するところは、結局宗教の改革にある。今やプロテスタンテイズムの使命終り、更に社会を指導して行くべき能力はもうない。（中略）プロテスタンテイズムは人格の尊厳、自由、独立の思想となつて表れて、従来、我が国を指導して来た。が今やその指導者の地位を他の新しい宗教にゆづらねばならない時が来た。（中略）プロテスタンテイズムの罪は個人的な所謂『罪』であるが、吾々の獲得せねばならぬ宗教に於ては、罪とはアンテイ・ソウシアルを意味する。プロテスタンテイズムに於ては救ひと云ふものも非常に個人的なものになつてゐるが、吾々のいふ真人の救ひとは吾々が社会化されることである。[32]

こうした学生たちの発言は、多分に中島たちの喚起に触発されたものであったとは言え、彼らの、従来の日本の教会が示してきた信仰理解や宣教姿勢に対する疑念と不満が噴出していたことは読み取れる。しかしその一方で、「吾々はキリスト教に本質を握んでゐなくてはならない」とか、「その本質に社会指導の可能性のあることを信じて疑わない」といった意見も提出されており、彼らが、キリスト教の本質についての原理的な問題意識を強く持っていたことも窺い知ることができる。[33]

この討議会においては「決議」といったものはなされなかった。それは、中島たち指導委員が、形式的な決議といったものを考えてはおらず、何よりも参加した学生たちの真摯な討議こそが大切であると考えていたからではないかと、後に参加した学生の一人であった岡崎滉は述懐している。[34]

けれども、このような従来の日本のキリスト教に対する反省と批判と社会的な関心の高まりは、この時期になって突如として起こったものではなかった。既に一九二〇年七月に開催された同盟の第三〇回夏季学校では、吉野作造による「社会問題と基督教」と題する講演が予定されており[35]、また、翌二一年一月の同盟の機関誌『開拓者』には、森戸辰男の「基督教と社会的保守主義」と題する文章が掲載されている。その中で森戸は、当時の日本のキリスト教の体質をめぐって、次のように厳しく批判している。

民衆はキリスト教より離反しつゝある。そのかみ、キリスト教は貧しき者、虐げられし者に対する喜びの音信として民衆の前に啓示せられ、民衆運動の源泉となつた。然るに今日民衆はキリスト教に対して益々無関心になりつゝある、否な敵意をさへ持ちつゝある。而して凡ての偉大なる民衆は、も早キリスト教の名に於て行はれざるのみならず、屢々反キリスト教の旗印の下に行はれつゝある。（中略）我国に於ける泰西文化の初期の輸入が主としてキリスト教によつて行はれたがために、泰西文化は、その善きにつけ悪しきにつけキリスト教と連想されること、なつた。然るに、我国のキリスト教の主なる輸入者である英米の諸国は。当時に於て既に資本家的民主々義を以てその国是として居たに拘らず、我国は当時未だ軍国的専制主義の支配の下にあつた。故にキリスト教に関係して伝へられた資本家的民主々義は、当時の我国に於ては非常なる進歩思想であつたのである。（中略）ところが、今日では事情が丸で変つて来た。キリスト教はも早西洋文明の唯一の渡橋ではなくなつた。（中略）なおキリスト教が泰西文化の唯一の門戸でなくなつてからは、我国に於ける進歩的青年は欧米に於ける進歩的思想に接するために、キリスト教に趨く必要を感じなくなつて来た。かくてキリスト教は従来の進歩的気質を失ふに至つたのである。（後略）[36]。

三　エルサレム宣教会議とイエス伝研究運動

こうした問題意識の高まりの中で全国基督教学生討議会が開催されたのであったが、それはまた、国際的なキリスト教の思潮の流れでもあった。この討論会が開催された一九二八年の三月二四日から四月八日にかけて、エルサレムで国際宣教協議会（International Missionary Council）の世界宣教会議（「エルサレム宣教大会」、以下、時に「エルサレム会議」と記す）が開催されている。[37] この会議では、先進諸国における「近代産業」、「人種」、「農村」、「宗教教育」などのさまざまな領域の「現代的人道問題」が議論され、イエス・キリストの福音の社会的実現をめざす「信仰の社会化」というスローガンが、世界のキリスト者が共通して取り組むべき課題として打ち出され、[38] 大会で採択された宣言には、世界のキリスト者の使命が次のように謳われている。

吾人の使命は、神が斯くあり、又人が斯くあらねばならぬ姿を表はす者としてのイエス・キリストを宣伝する事である。吾人は彼に於て人となりたる神、即ち吾人が其の中に生き、動き、而して存在する処の、神の終局なれど常に発展して止まざる顕現を見出すが故に、吾人は彼に於て宇宙の究局的実在と直面し、彼は又、吾人に完全にして無限なる愛と正義の父としての神を知らしむるのである。[39]

このエルサレム会議で議長として牽引的な役割を果たしたのはアメリカＹＭＣＡの学生部門の指導者のジョン・Ｒ・モットであった。[40] 同会議には、日本から鵜崎庚午郎を団長として、小崎道雄、都留仙次、柳原貞二郎、久布白落実、Ａ・

K・ライシャワー（長老派宣教師）、C・W・アイグルハート、W・アキスリングら計八名が「代員」として派遣されたが、日本に戻ってきた彼らを迎えて、日本基督教連盟は、同年六月一四日から一六日にかけて日本青年会館で「全国基督教協議会」を開催して、エルサレム会議の報告と、今後の活動方針について協議した。この協議会には全国から二七〇名の参加者があったが、その席上で「世界の混乱を救う主イエス」を新しい聖書解釈学や聖書社会学によって学び直すことが決められ、次の「宣言」が採択された。

不安と不足感は現在全世界に溢れている。科学的知識の発達、交通機関の増進に伴って人類の思想が大変化を与えられると共に、古来享け継がれた諸宗教も今やその更正を受けつつあり、そのあるものは既に破滅に瀕している。永きに亘って尊厳犯すべからざるものとされ来れる諸制度が、或るものは全く棄却され、或るものはその存在価値を疑われつつある。（中略）謹んで全国の兄弟姉妹に告ぐ、世界は悩んでいる。日本の悩みこそ殊に甚だしい。「行詰った」「国難来る」の語の流行は、之を証して余りがある。唯、活けるキリストのみこれを救い給ふのである。我等は、キリストに従はねばならぬ。キリストを伝へねばならぬ。[41]

なお、エルサレム会議に「代員」を派遣するに当たって連盟は、一九二七年一〇月一八、一九日に開かれた第五回総会において（会場は本郷教会）、日本側から提出すべき宗教的社会的諸問題に関する調査研究を行なうことが決められ、その際に、特に調査すべき事柄が「産業の人道化」の問題であるとして、次の六項目がその調査の眼目に挙げられている。

一、日本産業界に対し基督教の立場と改善を計るべき諸点
二、教会に於ける産業界と基督教界との交渉関係
三、教会が産業界の改善にために為すべき領域
四、産業に関する思想上の指導と教会の責任
五、産業世界の諸運動と教会の位置
六、泰西の思想が我が産業背界に及ぼせる善悪の影響[42]

この決定を受けて連盟は、名古屋、大阪、京都、神戸、仙台の各地で、連盟関係の教役者たちが中心となって集団調査を実施して、その結果を「伝道について」「他宗教との関係」「宣教師と伝道地」「キリスト教教育」「産業の人道化」「人種問題」の六項目に分けて報告した[43]。ちなみに、「産業の人道化」のテーマについては大阪基督教連盟が担当しているが、その中心メンバーであった賀川豊彦は、「現在日本の教会対産業界と教会の産業界に為す可き事」として、「教会がパンに関する事を如何にも不幸なるもの、如く考へ、パンを論ずるは世俗的であつて、恐らくは教会が社会改造の中心をなす事が出来ないであろう」と、従来の日本の教会の宣教の姿勢に対して反省を促している[44]。

エルサレム会議には、日本代員の実務委員として、日本基督教青年会同盟の学生部担当主事の中原賢次も参加している。中原は、先の日本基督教連盟の全国キリスト教協議会での決議を受けて、同盟もそれと連動する形で新たな活動に着手する必要を覚えた。そして、この年の七月に開催された同盟の第三八回夏季学校の主題に「真のイエスを見い出さんために」というスローガンが選ばれ、プログラムの最終日には、次のような決議が採択された。

第三八回基督教青年会夏季学校に来校せる我ら一同は、基督教青年会同盟が、キリスト宣教開始一千九百周年を記念として先に万国連合の下に開始せるイエス研究の有する重大なる意義と使命を認め、全国キリスト者青年・学生がこれに参加する必要を痛感し、ここに全国基督教青年会が速やかにイエス研究会に参加し、率先してともにイエス研究を開始せんことを希望す。[45]

そうして先の全国基督教学生討議会が開催されたのであるが、折りしも学生討議会が行なわれた同月一日から翌二日にかけて、日本基督教連盟の第六回総会が開催されており（於　銀座教会）、かねてより懸案となっていた連盟の「社会信条」が制定されている。[46] この「社会信条」は、日本のキリスト者の社会的使命について、次のように高唱している。

我等は神を父として崇め人類を兄弟として相親しむ基督教的社会生活を理想とし、基督にいって示されたる愛と正義と融和とを実現せんとする者である。我等は一切唯物的教育、唯物的思想、階級的闘争、革命的手段による社会改造を排し、又反動的弾圧にも反対し、進んで基督教教育の拡張を計り、身を以て社会問題の解決に当らんとする士人の我等の間より多く出現せんことを祈るものである。我等は社会の組織体の中に基督の生命を活かし、これによりてのみ当今の悩みは救はるべしと主張し、且つ富は神よりの受託物にして、神と人とのために捧ぐべきものと信ずる者である（傍点引用者）。[47]

文面における、国家社会の急激なファシズム体制への傾斜に対する危機感とマルクス主義に対する自己防御と対抗の姿勢は否むまでもない。[48] また、この「社会信条」の中身は、具体性に欠けたスローガンの総花的な羅列といった印

象は拭い難いものがあった。

だが、そうした限界があったとは言え、この「信条」には、この時期の日本のキリスト教の社会的な関心の所在もまた、表われていると言えなくもない。たとえば、この「社会信条」には、日本のキリスト教が取り組んでゆく実践的な課題の具体的な項目として、「人の権利と機会の平等」、「人種及民族の無差別待遇」をはじめ、「婚姻の神聖、貞操に対する男女同等の責任、家庭生活の保護」、「女子教育、社会、政治及産業界に於ける位置の改善」、「児童人格の尊重、少年労働の禁止」、「公娼制度の廃止、及之に類する営業の徹底的取締」など、さまざまな人権擁護をめぐる活動目標が掲げられ、最後に「軍備縮小、仲裁裁判制の確立、無戦世界の実現」と世界平和の実現にむけての取り組みも盛り込まれている。「最低賃金法、小作法、社会保険法、国民保険に関する立法の完備と施設」、「生産及消費に冠する協同組合の奨励」、「傭人、被傭人の間に適当な協調機関の設置」、「労働者教育の普及徹底、合理的労働時間の制定」「所得税及相続税の高率累進法の制定」といった条項は、いかにこの時期に、国民の生活が逼迫していたのか、労働者や農民の地位改善と生活条件や地位の改善が求められていたのかを物語っていよう。[49]

その意味では、中島が提唱していた「社会的キリスト教」の主張は、必ずしも彼の個人的な着想によるものではなく、この時期の日本のキリスト教に対する世界的な要請に呼応したものでもあったと言えよう。

さて、モットがエルサレム会議で採択された使命を携えて来日したのは、翌二九年四月のことであった。[50] 彼を歓迎する目的で日本基督教連盟は、特別協議会を鎌倉と奈良で開催したが、四月一〇日の鎌倉でもたれた協議会では「思想問題に関する決議」が行なわれて、次の声明文が採択されている。

唯物的思想、共産主義等各その主張に熱中する為め政治運動、社会運動、労働運動等に階級的闘争の精神を激成し、

基督教の主義主張は否定され又は没却されんとして居る。斯る思想、運動の現状に直面したる今日の基督教徒は実生活に即してその奉ずる基督の福音（就中社会的福音を）一層積極的に高調し、且つ之等の思想運動に対して基督教の立場を宣明する事の急務るなを認むる。[51]

この文面に示されているように、当時の連盟には、唯物的階級闘争や共産主義思想が日本の教会の信徒たちや学生たちに浸透し、その思想的な影響を受けつつあることに対する警戒感は。非常に強いものがあった。なるほど、四月一三日にもたれた奈良協議会で採択された「教会対思想問題に関する決議」においては、「教会をして、社会思想指導等の権威たらしむる為にま先づ教会指導者達が現代の社会思想及社会事業に就て深き研究を重ね現代の社会の社会的欠陥の奈辺にるかを充分に理解し、（中略）社会は複合的存在なるを以て之を経済一元論の立場よりのみ見る事の誤なるを指摘し宗教道徳の文化に於ける権威を今迄よりも一層高調すること」と教会の社会的な使命について言及されており、加えて「教会は近時社会に旺溢する反動思想に対し鋭敏なる警戒を忘れず機会ある毎に明快なる批判を下し国民をして其の帰趨を誤またざらしむる事」といった訓示もなされている。しかし、こうした決議に示されている高踏的な指導者意識をもっている限り、当時の日本の民衆が強いられていた生活の窮状に、どれほどまでに迫ることができたであろうか。

確かに、連盟にはこのような時局に対する認識の限界はあったものの、しかしそれでも、日本のキリスト者の社会的な関心を喚起している点は、やはり評価されてよい。これ以降、連盟は、社会部を中心に社会運動、労働問題、農村問題などに関する研究の必要を認めて、同年八月六日から八日にかけて、メソジスト教会社会部、組合教会社会部、クリスチャン教会、日本青年会同盟、矯風会などの一九の教会、及びキリスト教団体との共催で社会問題協議会を開

催した（会場は青山学院）。この協議会の講師に招かれたのは、片山哲、杉山元治郎、生江孝之、杉山謙治、賀川豊彦であったが[52]、その中で特に杉山が、「学生思想問題に就いて」という論題で報告していることは注目される。連盟も、当時の学生運動の動向については無関心ではいられなかったのである。

モットの来日を受けて日本基督教青年会同盟においても、彼を迎えて「日本基督教青年会組織二五周年記念協議会」がもたれたが、その時のことを、後に大井蝶五郎は、次のように記している。

世界宗教会議の決議遂行の使命を帯びて連盟委員長モット氏より、日本基督教青年会同盟組織二十五年記念協議会が現代的適応の清新味をもって開かれ、基督教的社会観の樹立及び学生思想指導の基督教的対策が議せられ、学生運動に関する決議があった。（中略）其の結果、東京に於て生れたのが社会的宗教運動としての基督教学生ミッションであった。（中略）同四年には東山荘に於て日本基督教新運動の協議会がモット博士を中心に開かれた。即ち、賀川豊彦氏の計画プログラムに依る「神の国運動」の形態がモット博士の支持によって採用され、賀川氏を中心として三ヶ月計画の神の国運動の企画が決議され、五年一月より全国的に開始されることになった[53]。

こうして同盟の中に基督教学生ミッションが結成されることになったのであったが、同盟のイエス伝研究運動は、こうした動きともあいまって、全国の都市ＹＭＣＡの学生キリスト者たちにも波及していった[54]。各地の学生青年会は、この年の七月に開催された同盟の第三八回夏季学校での「イエス伝研究会」に参加して、熱心に討議を重ねて、日本のキリスト者があらゆる社会の方面で「イエスに依る生活」の実践を推進してゆくことを確認して、学生たちに浸透しつつあったマルクス主義やコミュニズム哲学を克服して、キリスト教による新たな社会哲学の構築を目指してゆく

ことにした。[55] これが、その後の「学生キリスト教運動」へと展開してゆくのである。

ただし、ここで決して誤解されてはならないことは、彼らが、マルクス主義の唯物論的な階級闘争の思想的影響を受けたからではなく、むしろ、それへの対抗思想としてのキリスト教のありようを模索していたことであり、その思想的な立脚点を、歴史上の「イエス」に求めていたことである。[56] つまり、彼らにとっては、ナザレのイエスの生と人格こそが、唯物論的世界観に対抗して、それを克服するものとして考えられていたのであって、換言すれば、それまでの既存の日本のキリスト教が提示してきた信仰理解や救済観では、国家社会の現状を克服打破することができないと考えられていたのであった。

（以下は、（2）に続く）

注

（1）（2）「発刊の辞」（『社会的基督教』第一巻、一九三二年五月）一頁。創刊号の奥付によると、同誌の発行人は末包敏夫、編輯人は金田弘義、印刷人は丹波自治正幸、発行所は社会的基督教生徒関西連盟であった。ちなみに、同連盟の住所は末包敏夫の住所（京都市寺町通鞍馬口下ル二筋目西入ル）と同じであるから、末包の自宅に事務局が置かれていたものと思われる。同誌は、一九三二年五月より四一年一二月号までの、ほぼ一〇年の期間、発行されている。発行責任者は中島であり、石田英雄が書記局（庶務、会計）を担当し（後に、竹内愛二）、編集実務には高橋貞二（後に、溝口靖夫）が当たった。戦後になって、竹内が短期間ながら、再び一九五〇年九月より翌五一年一月まで『社会的基督教』の名称で発行を続けたことがある（神戸キリスト教青年会編『神戸とＹＭＣＡ百年』一九八七、二四四頁）。なお、『社会的基督教』の書誌

的研究としては、武邦保「雑誌『社会的基督教』の一研究―（一九三二年―四一年、月刊・発行人・中島重）」（『キリスト教社会問題研究』第三七号、一九八九年三月）がある。

（3）中島が同志社を去るに至った理由は、一九二八年に総長であった海老名弾正が有終館失火事件の責任をとって辞任したことによる。その際に法学部長であった中島は、理事会追及の急先鋒となり、これに対して、翌二九年五月に連合教授会が中島の辞任を決議し、こうして彼は辞職することを余儀なくされたのであった（『同志社百年史』（通史編二）学校法人同志社、一九七九年、一〇七二―一〇七八頁）。

（4）井田昭子「中島重と関西学院―ＳＣＭと社会的キリスト教運動をめぐって」（『キリスト教主義教育』第一八号、関西学院キリスト教主義教育研究室、一九九〇年一月）三二頁。なお、大石兵太郎によれば、中島を関西学院のベーツ院長に推挙したのは賀川であったという（大石「大学事始」『関西学院六〇年史』一九四九年、二六三頁）。

（5）チャールズ・Ｈ・ジャーマニー『近代日本のプロテスタント神学』（布施涛雄訳、日本基督教団出版局、一九八二年、原著は、Charles.H.Germany: “Protestant Theologies in Modern Japan, A History of Dominant Theological Currents from 1920-1960“ The Board of Publications, 1969 ））一〇四頁。

（6）「学生キリスト教運動（ＳＣＭ）」についての先行研究は多くない。当事者の歴史的な証言として、中原賢次『基督者学生運動史―昭和初期のＳＣＭの闘い』（日本ＹＭＣＡ同盟出版部、一九六二年）が運動の経過の詳細について原資料に基づいてたどっている。研究論文としては、武邦保「学生キリスト教運動（ＳＣＭ）の思想と行動」（『キリスト教社会問題研究』第二六号、一九七七年一二月）。その他に、木谷秀文「『昭和』初期におけるＳＣＭの闘い」（同志社大学大学院神学研究科修士論文、一九九二・三）、橋野高明「一九三〇年代ＳＣＭ（キリスト者学生生運動）の活動と解体後の動向」（同志社大学大学院神学研究科博士論文、二〇〇八・三）などがある。特に橋野氏の仕事は、ＳＣＭに関わった一二〇名近くの学生たちの足跡を追跡調査した貴重な研究である。また、佐々木敏二「『社会信条』の精神にもとづく実践とその崩壊」（同志社大学人文科学研究所編『戦時下抵抗の研究Ⅱ―キリスト者・自由主義者の場合』みすず書房、一九六九年、所収）は、学生キリスト教運動や社会的キリスト教も含めて、この時期の日本のキリスト教界の動向を概観したものである。

（7）そうした中で自分の学校史の中で、独立した節を設けて、それぞれの時期の学生たちの動向まで目配りして叙述している『明治学院百年史』（学校法人明治学院、一九七七年）は稀有な例であろう。

（8）戦前日本における学生運動の歴史についての参考文献には、次のようなものがある。杉山謙治『日本学生思想運動史』（日本基督教青年会同盟学生運動出版部、一九三〇年）、菊川忠雄『学生社会運動史』（海口書店、一九四七年）、住谷悦治他

『日本学生社会運動史―京都を中心に』（同志社大学出版部、一九五三年）、高桑末秀『日本学生社会運動史』（青木書店、一九五五年）、中村新太郎『日本学生運動の歴史』（白石書店、一九七六年）、H・スミス『新人会の研究』（松尾尊兊・森史子訳、東京大学出版会、一九七八年）など。

（9）中澤俊輔『治安維持法―なぜ政党政治は「悪法」を生んだか』（中公新書、二〇一二年）七一頁。たとえば、一九二七年頃に東大新人会に参加したことがある亀井勝一郎は、その当時の新人会の合宿生活の様子を次のように振り返っている。「『新人会』の本部は合宿を兼ねていたが、これは共産主義の修練道場ともいふべき存在であった。（中略）床の間にマルクスとレーニンの肖像が掲げられ、赤旗が垂れさがっている。部屋部屋のふすまには激越なポスターが張りめぐされ、厳格な掟と日課表が掲げられてある。連日の会合、研究会、宣伝ビラの印刷、配布、そのあいだにひまさえあれば机の前に端座して、国禁の書を耽読したものである」（亀井『わが精神の遍歴』角川書店、一九五四年、引用は『人生の名著1』大和書房、一九六七年、所収、一八〇頁）。

（10）竹内洋氏によれば、「大正時代の終わりには、もっとも頭のよい学生は『社会科学』つまりマルクス主義を、二番目の連中が『哲学宗教』を研究し、三番目のものが『文学』に走り、最下位に属するものが『反動学生』といわれた。昭和初期には、ジャーナリズム市場はマルクス主義者によって独占されているとか、左翼化すればするほど雑誌が売れるといわれるようになる。（中略）マルクス主義本を読んで理解しない学生は『馬鹿』であり、読んで実践しない学生は『意気地なし』となる」という（竹内『教養主義の没落―変わりゆくエリート学生文化』（中公新書、二〇〇三年、四四頁）。当時の学生たちの思潮の雰囲気を伝えるものであろう。

（11）潮見俊隆『治安維持法』（岩波新書、一九七七年）二六―二七頁。なお、治安維持法と学生運動の取締りの歴史的な経緯については、さしあたり、奥平康弘『治安維持法小史』）筑摩書房、一九七七年、六六―八一頁）、松尾洋『治安維持法と特高警察』（教育社、一九七九年、一〇四―一一六頁）、荻野富士夫『思想検事』（岩波新書、二〇〇〇年、二四―二八頁）を参照されたい。

（12）村上重良編『近代詔勅集』（新人物往来社、一九八三年）二四八頁。

（13）田中真人「京都学連事件と同志社」（『同志社百年史』（通史編一）学校法人同志社、一九七九年、所収）九五九―九六〇頁。一九二七年五月に京都地方裁判所で行なわれた第一審では、全員が禁錮一年以内の有罪判決を受けた。控訴審の過程で、三・一五事件、四・一六事件が起こり、被告の相当数がこれにも連座させられ、刑が加重されていった（前出、荻野『思想検事』二四頁）。

（14）ヨゼフ会については、今井鎮雄編『牧の羊―末光信三先生・信子先生追悼集』（一九八一年）に「ヨセフ会の歩みと同志社」と題された座談会記録が収められている（同書、六〇―七一頁）。

（15）『同志社大正十四年度報告』（引用は、西田毅「大正デモクラシーと同志社」前掲『同志社百年史』（通史編一）所収、九一五頁）。

（16）たとえば、一九二八年の夏に社会民衆党（委員長は安部磯雄）の京都の地方組織が主催した夏季大学の講師の顔ぶれには、中島重、住谷悦治、田畑忍、野村重臣、吉川末次郎と、すべて同志社の関係者で占められているし、杉山元次郎が法学部の後援のもとで、同志社で農村社会学の集中講義をしたり、農民運動についての講演会を開催したりしている（前出、田中真人「京都学連事件と同志社」『同志社百年史』（通史編一）所収、九六〇頁）。

（17）「雲の柱会」（『同志社時報』第二三六号、一九二五年一二月一日、一二頁）。ちなみに、中島は、自己が想望しているキリスト教とマルクス主義との立場の相違について、『社会的基督教概論』（日本労働者ミッション、一九二八年、再版）の中で、「マルクスの階級闘争における『社会化』は、同階級間の同情・相互扶助・犠牲的関係を示すが、キリスト教の言う『社会化』は、異階級間の人間の結合の進化を示す」と、マルクスが階級闘争において定義した「闘争本位の社会進化論」との異質性を強調している（同書、八―九頁）。

（18）この間の詳細な経緯については、拙稿「日本における『社会的キリスト教』の胎動―中島重と賀川豊彦の出会いをめぐって」本誌、第五九号、二〇一〇年一二月）を読まれたい（一五―二八頁）。

（19）田澤晴子『吉野作造』（ミネルヴァ書房、二〇〇六年）一三三―一三四頁。

（20）青年会の常務理事であった藤田逸男は、後に、自分は賛育会を通して「吉野先生の人道論」を実現させようと考え、家庭購買組合では吉野の「デモクラシー理論」を、社会の経済面で実現しようと努力してきたと振り返っている（藤田『賛育会物語』賛育会、一九五三年、四三頁）。

（21）関東大震災における同盟の対応については、奈良常五郎『日本ＹＭＣＡ史』（日本ＹＭＣＡ同盟、一九五九年、二三七―二四〇頁）、『東京キリスト教青年会百年史』（財団法人東京キリスト教青年会、一九八〇年、一七四―一七八頁）が記述している。当時、神戸で活動していた賀川は、この関東大震災が起こった翌九月二日に、即座に、神戸イエス団の青年たちを神戸市内の各教会に巡回させて、救護活動の緊要を訴えさせるとともに、自らも、急遽、結成した神戸のキリスト教救援団体の代表として東京に赴いて、同月五日には東京市連合震害救済所を訪れ、次いで神田青年会館の焼け跡を視察し、同盟主事の石田友治を激励した。その後、賀川は、義損金の募集を目的に、西日本を中心に巡回講演を精力的に展開しているが、その講演の回数は、五六回にも及んでいる。こうした支援に支えられて、一方の東京基督教青年会は、羅災者救

援活動を展開することとなるが、やがてこの働きは、賀川側に委嘱されることになって、翌一〇月一九日には本所基督教産業青年会として独立して、在京における賀川のセツルメント運動の拠点となるのである。

(22) 本所基督教産業青年会については、大里知子「賀川豊彦のセツルメント運動（Ⅱ）―本所基督教産業青年会を中心として」（『賀川豊彦研究』第二四号、一九九三・三）が、事業運営の実際を実証的に検討している。

(23) 『同志社学生キリスト教運動史―同志社創立一三五年記念』（同志社学生キリスト教運動史編集委員会、二〇一〇年）五九、六三―六四頁。

(24) 藤田「開会の辞―学生運動に新転向の為に」（東京帝国大学学生基督教青年会主催『全国基督教学生討議会報告』同青年会、一九二九年三月）二頁。

(25) 「全国基督教学生討議会開催の趣旨」（前掲『全国基督教学生討議会報告』所収資料）。なお、同討議会の開催に当たって全国の大学、専門学校、旧制高校の基督教青年会に発送された「発起書」は、『東京大学学生基督教青年会百年記念誌』（財団法人東京大学学生基督教青年会、一九八八年）に原文が収録されている。それによると、「大会の目的」は「現代に於ける基督教学生として解決すべき最大問題＝信仰、思想上の問題、実際問題＝に対する討議を徹底し、吾人基督教学生の態度を表明する事」とある（同書、七八頁）。

(26) 「討議会議題」（前掲『全国基督教学生討議会報告』所収）四頁。

(27) また、この討議大会には、当時の京城からも四校四名の参加者があったと言われる。ただし、折りしもこの討議会が行なわれた翌一一月一〇日には、昭和天皇の即位式が予定されており、そのために、討議会の主催者側では「当局の理解を得る為に、非常な努力と繁雑な手数が払われ、参加する学生たちも、「学校当局から取審べを受けたり、列車内で刑事の訊問を受けたり」したという（中原賢次「ＹＭＣＡ歴程―青年会は何処へ行く」（『開拓者』第二七巻第二号、一九三二年二月一日）三〇頁。

(28) 今中は、第五高等学校在学時代の一九一四年四月に熊本の草葉町教会で沢村重雄より受洗してキリスト者になった。ヘーゲル哲学、特にその汎神論の影響を受けていたが、受洗するに到った直接の契機は、金森通倫の感化であった。翌一五年九月に東京帝国大学法科大学政治学科に進学して、海老名弾正が牧していた本郷組合教会に転籍したが（同年九月二三日）、その間、海老名の伝道を支える一方で、吉野作造の論文の口述筆記などをして『新人』の編集にも当たった。一九一八年七月に東京大学を卒表した彼は、海老名のすすめと世話で同志社大学法学部教授となった。しかし、学生定員増加による財政の改善策が、キリスト教主義の名目で何度も否決されたことで理事会と衝突して、一九二六年一一月二一日に彼は同

志社を辞職して、しばらく京都大学農学部、京都大学で教えたが、一九二八年一一月に恩師の小野塚喜平次と吉野の指名で九州帝国大学法文学部教授となった。今中は、同志社時代に先輩の中島とは多元的国家論やプラグマティズムで絶えず論争していい、後に今中は、中島にとって自分は「叛逆児」であったと回顧している（今中「私の政治学の歩み」竹原良文編『今中次麿―生涯と回想』法律文化社、一九八二年、五―六頁）。彼は、一九二六年三月の『同志社時報』で、当時の同志社の神学教育をめぐって、次のように訴えている。「同志社は人物の養成を目的となし、真理の討究と云ふが如き高遠なる使命を有するものではないと或る校友諸君は云ふ。然らば問ふ。吾教界、特に組合教会の現状とその行詰りの打開策は如何？同志社全学校の使命は神国の宣伝と建設とでなくてはならぬ。故に同志社の教育は神学科を中心とする一大オーケストラでなくてはならぬ。神学科の使命は単なる伝道師の要請ではない。基督教文化の宣布とそれに必要なる神学の自由研究である。吾教界の現状を見るに、教会世界の先覚既に老い、教会亦社会の時代思潮からとり残されて居る」（今中「学問の研究と同志社に就いて交友諸君に訴ふ」同紙、第二三九号、一九二六年三月一日）二頁。

(29) 前掲『全国基督教学生討議会報告』一九頁。

(30) 前掲『全国基督教学生討議会報告』二〇頁。

(31) この年の三月に中島は、自分が属していた同志社教会の教報に「教会の社会的使命」と題する文章を書いている。その中で彼は「教会は教会の為めの教会ではない」として、次のように主張している。「神の国の為めの教会である。神の国建設のための機関である。神の国とは神の衷に建設せらるゝ人類の大共同社会である。愛と奉仕と協力の精神に依りて成り立つ人類のグレート。コンミュニチーである。人類社会に於ける神御自身の為の実現である。教会は此が為めの結社であり、此が為めの団結である。（中略）神の国実現のための精神的機関たる本質を発揮し、社会化愛の源泉であることが、今日教会の根本使命である。教会よ、独善主義を捨てよ、自足主義を止めよ、眼を放つて、人類の大社会が如何なる方向に動きつつあるかを凝視せよ、神は必ずしも教会のうちに安閑として座して居給はず、国際社会より戦争を絶滅し、資本的権力の下に奴隷たる労働者を解放せんとして十字架につかんとしておられる。教会も立たねばならぬ」。彼にとって信仰とは、「日常の生活にこそ神の其の礼拝があり日常の行動にこそ神への真の祈祷がある」のであって、「日曜日の礼拝は言はゞ信徒の神の前に於ける勢揃ひであり閲兵式」なのであり、そこにおいては、「各信徒が神への忠誠と、神の為めの戦闘的決意と、神の敵に対する攻撃的精神とを以て、集団的に之を表明した、益々その精神と決意と信仰とで強め、実戦にのぞむ為めの勢揃ひをする」ことが求められる。したがって、中島にとっての神礼拝とは、「儀式的宗教の徹底的脱却」であり、「社会奉仕的意義の発揚」の場なのであった（中島「教会の社会的使命」『同志社教報』第二号、一九二八年三月一〇日、一頁）。

(32) 前掲『全国基督教学生討議会報告』一二―一八頁。

(33) 同志社大学からこの討議会に参加したのは、講師の中島をはじめ、同志社キリスト教青年会を代表して加藤謙爾、星野一、労働ミッションから山本信市、手代木文、そして同志社女学校専門部青年会から根本静枝であったが、参加した報告が、この年の一一月一五日付の『同志社新聞』に「合法的階級闘争により神の国建設に務めん　基督教徒が社会進出を約した東山荘の社会思想討議会」という見出しで掲載されている。それによると、参加した同志社の学生たちは、「日常から労働者ミッション研究其他の会合で討論の機会を多く有つて居た為に始終論戦の「一方の旗頭となり、討論会を牛耳っていた」という（「合法的階級闘争により神の国建設に努めん」『同志社新聞』第三一号、一九二八年一一月一五日、二頁）。

(34) 岡崎「全国基督教学生討議大会」（前出『東京大学学生基督教青年会百年記念誌』所収）八五頁。

(35) 吉野は、この夏期学校で講演をすることを約束していたが、前日になって発病して出席できなかった。しかし彼は、『開拓者』に自分が話す予定であった項目について述べた文章を執筆している。その中で吉野は、「社会問題は尤も卑近な意味に於てパンの問題である」として、次のように述べている。「（前略）パンの問題も霊性の問題と別にして、即ち客観的に社会制度の問題として考へる必要がある。此の事を旧式のキリスト教は考へなかつた。（中略）否パンの事なぞを新しく云ふものがあると、余計な事をするものかの如く見たり、甚だしきに至つては、基督教の尊厳を冒瀆するものなかなるかの如くに考へたのである。今日でも教会の先生の中には、社会問題などに干渉するは教会の本分ではないなどと云ふもののあるは、即ち此の余毒を受けたものに外ならない（中略）社会問題に面をそむけたのは基督教のあやまりである」（吉野作造「社会問題と基督教」（『開拓者』第一五巻第八号―夏季学校号、一九二一年九月一日、四―五頁）。

(36) 森戸辰男「基督教と社会的保守主義」（『開拓者』第一六巻第一号、一九二一年一月一日）二―四頁。

(37) この会議は、一九一〇年に開催されたエディンバラ世界宣教会議の継続委員会が母体となって一九二一年に発足した国際宣教協議会による最初の世界宣教会議であり、議長には、エキュメニカル運動の指導者であるモットが就いた。彼は、英国教会の信徒のオールダムとともに、エディンバラ世界宣教会議の牽引的な存在であった。エルサレム会議は、第一次世界大戦を経て後の欧米世界のキリスト教の指導者が、それまでの宣教の姿勢に対して疑問を抱き、キリスト教の原点に返るための象徴的な場所として聖地エルサレムを開催地に定め、一九二八年の受難週から復活祭にかけてもたれた。この時期のエキュメニカル運動の展開については、神田健次「草創期の現代エキュメニカル運動」（関西学院大学神学研究会編『神学研究』第三七号、一九九〇年三月）が詳しい。

(38) こうした社会的な関心の先鋭化は、学生青年会ばかりではなく、都市ＹＭＣＡにおいても見られた。この年に有馬でもた

れた全国主事会では、「労働者教育事業開始」、「社会改造諸運動に対するＹＭＣＡの使命研究」、「ＹＭＣＡ主義及びその精神の普及」に関する特別委員会が設立されている（『新編日本ＹＭＣＡ史』日本ＹＭＣＡ同盟、二〇〇三年、六〇頁）。

(39) 筧光顕「エルサレム会議の収穫」（『開拓者』第七号、一九二八年七月一日）二頁。

(40) モットはエルサレム宣教大会に先立って、一九二五年一二月に、日本の教会側の参加と協力を要請するために来日したが、彼を迎えてもたれた日本基督教連盟主催の鎌倉協議会には、連盟常議員、連盟推薦の各教派、諸団体の有志合わせて五〇名が参集した、そして、一九二七年にエルサレムで世界宣教会議が開催されることに賛意を示し、翌二六年二月五日にもたれた連盟の常議員会において、正式にエルサレム会議の開催計画に対する賛成を決議したのであった。ちなみに、先の鎌倉協議会で、賀川豊彦は「日本教化私案」を発表して、「キリスト教の本質は、愛と親切である。それでどうしても、教科書的講壇キリスト教を脱皮せねばならぬ。（中略）愛と協力の実際の社会を作るにあらずば、決して真正の社会は出来上らない」と、「信仰の社会化」を訴え（賀川「百万人運動の精神」『雲の柱』第五巻第一号、一九二六年一月一日、二頁）、これが彼の百万人救霊運動、さらには「神の国運動」へとつながってゆくのである。。

(41) 『基督教連盟』第五一号、一九二八年七月一五日。なお、この「宣言」には、日本における社会問題の解決、及び社会運動に対してキリスト者がとるべき態度として、「社会上思想上の諸問題及びその影響に対して基督者の主張態度を明確にするため、適当の機関により之が対策を講じ、社会信条を提唱するの必要を認むること」、「産業は人の為めに存し人は産業の為めに存せず、産業を人道化するは今日の急務にして基督者の重大なる使命の一つと認むること」、「国際聯盟の思想精神を発揚し、不戦条約を支持し、国際の平和協力、殊に平和日（一一月一一日）に関する注意と理解とを深からしむること」の三項目が掲げられている。

(42) 生江孝之『日本基督教社会事業史』（教文館、一九三一年）二九一―二九二頁。エルサレム会議に対する日本側の対応については、小川智瑞恵「エルサレム世界宣教会議における宣教と教育」（『明治学院大学キリスト教研究所紀要』第三八号、二〇〇六年二月）が詳しい。筆者も多くのことを学ばせていただいた。

(43) 京都では、教役者に加えて同志社やその他の学校関係者が加わっている（「エルサレム会議準備の集団調査」『基督教聯盟』第四一号、一九二七年八月一〇日）四頁。

(44) 『基督教聯盟』第四三号（一九二七年一〇月一〇日）四―五頁。この調査報告書は、W・アキスリングによって英訳されて、エルサレム会議に提出されたが、邦文報告書は、一九二八年四月に『エルサレムに於ける世界宣教大会報告綱領』として連盟から刊行されている。その中の「産業の人道化」の項目で、それまでの日本のキリスト教の歩みをめぐって、次のよ

うな反省がなされている。「過去五十年内に於て我国基督教会が直面せし重要も問題は、福音の普及と教会の自給の点にあつた。従つてこの点に於ては相当の成果を収めしと雖も未だ日本の基督教会は、社会に対して充分の実力ありと言ふ事が出来ない。（中略）我国教会の傾向は、過去五十年間に於て、寧ろ福音主義並びに個人的救済を高調し来つた結果として、社会思想並に社会問題、産業問題に対しては、あまり深く触れ得なかつた憾みがある」（同書、四三頁）。そして、「今日教会は産業問題に関してなさねばならぬ」こととして、第一に「現代の社会問題と理解すること」であり、そのためには「一層社会的責任に醒める」ことが求められ、第二に、「今日の産業問題に対しては間接的ではあるが、何処までも道徳的、人道的立場より之に厳正に批判を加へ、同時に指導と目標とを示す」ことが必要であるとしている。さらに注意すべきこととして、「唯物主義思想に対する批判と指導」「マルクス無神論批判」「金権主義の排斥」「階級争闘激発の防止」「反動的ファシズム及び国粋主義者、帝国主義的傾向に対する批判」の五点を挙げている（同書、四五―四六頁）。

（45）『開拓者』第二三巻第一二号（一九二八年一二月一日）。エルサレム会議に先立って、一九二六年八月にフインランドのヘルシングフォルスで開催された第一九回基督教青年会世界大会において、第一次世界大戦から第二次世界大戦への移行期にあって、世界各国が直面した政治的、経済的危機に対して、キリスト者として、どのように対処すべきかが議論され、イエスの公生涯開始（エピファニー）一九〇〇年を記念するために、何らかの方法を考えることが決議され、その結果、全世界のＹＭＣＡの会員が、翌二七年から三ヵ年の期間、継続的にイエスの人格や使命についてそれぞれ自主的に研究し、それを世界のＹＭＣＡ運動の共通の問題として検討し合うことが決められた。日本ＹＭＣＡ同盟の委員会も、これに賛同して、この運動に呼応することになった。この課題を推進するために「イエス研究」特別委員が選ばれて、機関誌『開拓者』は、一九二八年一月号に「基督宣教開始千五百週年紀記念万国連動耶蘇研究運動」を掲げて、世界中央委員作成の三ヶ年の「イエス研究教案」の掲載を開始して、それ以降、ほぼ毎号のようにそのテキストを掲載したが、当初に計画されていた三ヶ年は貫徹されなかった（前出、『新編日本ＹＭＣＡ史』五七頁）。たとえば、大阪基督教青年会では、二八年一月より宗教部主事の石田次郎を中心に研究活動に着手され、折しも一九三〇年は、日本にキリスト教青年会が誕生して五〇年目の節目にあたることから、この記念すべき時期に「真のイエスを見いださんために」という標語のもので、共同テキスト（"World Study of Jesus Christ"）に基づいて活動を始めている（『大阪ＹＭＣＡ一〇〇史』（大阪キリスト教青年会、一九八二年、二一五頁）。

（46）この「社会信条」は、日本基督教連盟が、全国基督教協議会の「我邦の現状に鑑み我等基督の主義精神を社会制度、経済組織の上に実現せしむることの急務なることを認む」との建議に基づいて、その内容の立案を社会部と教育部に付託した

ものであるが、部長には田川大吉郎、副部長には生江孝之が就いた。

（47）『基督教聯盟』第五五号、一九二八年一一月一五日、四頁。

（48）同信条については、翌一九二九年三月に連盟から『社会信条の解説』（日本基督教連盟編）が出版されて、その執筆には田川大吉郎、小崎道雄、海老沢亮、生江孝之の四名が当たっている。なお、この年の六月に日本宗教懇話会の主催で東京神宮外苑日本青年館で開催された昭和天皇の即位を記念する御大典記念宗教大会では、神仏基の代表によって「我が国体に背反する共産主義の結社及びその運動の絶滅を期す」として、「現代世界の秩序を威嚇せんとする共産主義・無政府主義の如きは、我が国体の精神に反し人間心霊の尊厳を破壊するものなるを以て、我等は此の種の思想を根本的に絶滅し以て我が民族の精神を発揮しその国礎を永遠に確立せざるべからず」との決議がなされている（『日本宗教大会紀要御大典記念』日本宗教懇話会、一九二八年、四四五頁）。

（49）連盟の「社会信条」の内容については、『社会信条の解説』（日本基督教連盟編、一九二九年）が詳述している（執筆には田川大吉郎、小崎道雄、海老沢亮、生江孝之が当たっている）。また、この「社会信条」の内容を検討した研究としては、前出、佐々木敏二『社会信条』の精神にもとづく実践とその崩壊過程」（同志社大学人文科学研究所編『戦時下抵抗の研究Ⅱ』みすず書房、一九六九年、所収）が要点を記述しており、賀川豊彦の「神の国運動」との関わりについては、横関至「賀川豊彦と日本基督教連盟の『社会信条』（下）」（『大原社会問題研究所雑誌』第四三四号、一九九五年一月）が論じている。

（50）モットは来日するに当たって、エルサレム会議の開催を「時機を得たるもの」と位置づけて、次のように述べている。「世界大戦を経て驚くべき大変化は斎らせれた、基督教のプログラムは茲に再び考へ直され、再び新たに表現されなければならなかつた、基督教の指導者は国際的の興味を新たにし、世界的の見識を開かねばならなかつた、新たに勃興すつゝある諸民族よりの寄与貢献を受けねばならず、又多くの矛盾と錯綜との間に鎖されてゐる基督者を指導すべき必要が迫つて来た、而も指導者等が確信を欠き、使命感を失はんとするが如き状態に置かれんとする重大な時期であつた」（ジョン・アール・モット「エルサレム会議の感激」『聯盟時報』第六一号、一九二九年五月一五日、一頁）。なお、モットが帰米したのは五月二八日のことであったが、その前日の五月二七日に東京に立ち寄った彼は、連盟の常議員会に出席する前に勲一等に叙せられるとともに瑞賓賞も授与し、徳川公爵の午餐会にも招かれている（「モット博士送別晩餐会」同紙、第六二号、一九二九年六月一五日、五頁）。

（51）「特別協議会彙報」（前掲、『聯盟時報』第六一号）六頁。

（52）彼らはそれぞれ、「無産政党の現状に就いて」（片山）、「農村問題」（杉山）、「工場及び家庭工業に就いての問題」（生江）、

「教会社会問題に就いて」（賀川）のテーマで講演を行なった（基督教社会問題協議会編『基督教社会問題講演集』教文館、一九二九年、二頁）。この協議会の後、「基督教徒の立場より現代日本にある諸種の社会問題を研究調査する」ことを目的に、基督教社会問題協議会が結成された（委員長小林誠、副委員長眞鍋頼一・小崎道雄、事務所は日本基督教連盟内に置かれた）。

(53) 大井蝶五郎『社会的基督教』（パンフレット、一九三三年）三頁。

(54) 大阪ＹＭＣＡでは、一九二八年より主事の石田次郎の指導のもとでイエス研究会が誕生し、三年間続いている（滝口敏行『大阪ＹＭＣＡ一〇〇史』大阪キリスト教青年会、一九八二年、二一六頁）。

(55) たとえば、第一九回世界ＹＭＣＡ大会には神戸基督教青年会総主事の奥村龍三も出席したが、彼を囲んだ「歓迎親睦茶話会」が一九二七年四月にもたれた後に、五月には「基督教徒社会思想研究会」が、六月には「社会科学研究団」が神戸ＹＭＣＡの中に発足している。また、四月二三日にもたれた全国主事会で協議された事項には「ヘルシングフォース大会決議案」があったが、そこでは「来る三ヶ月、世界の青年会が協力して各都市に於てイエス研究会に力を注ぐ事」が確認され、聖書のイエスはマルクスらの訴える経済的平等観をもふまえ、これを既に実践しようとしながら新しい神の国をこの世につくられようとしていたとする考えを支持している（武邦保「『昭和初期』の神戸ＹＭＣＡ」『神戸とＹＭＣＡ百年』神戸キリスト教青年会、一九八七年、二二七頁）。

(56) このことは、日本のＹＭＣＡ内部でも誤解されている。たとえば、『東京キリスト教青年会百年史』の中には、次のような記述がなされている。「ＳＣＭは、元来が神学の基礎をふまえた学生キリスト教運動 Student Christian Movement であるが、この頃の日本では、マルクス主義に拠ってキリスト教の社会化を唱える社会的キリスト教運動 Social Christian Movement になっていた」（傍点引用者、同書、一九八〇年、二三六頁）。